

小論文問題

次の課題文を読み、「ケアすることとは」について、看護の視点であなたの考えを述べなさい。なお、自分自身の考えを深めるために、本書ならびに関連する文献や図書を読むことを推奨します。

自分以外の人格をケアするには、私はその人とその人の世界を、まるで自分がその人になったように理解できなければならない。私は、その人の世界がその人にとってどのようなものであるか、その人は自分自身に関してどのような見方をしているかを、いわば、その人の目でもって見てとることができなければならない。外から冷ややかに、あたかも相手が標本であるかのように見るのではなく、相手の世界で相手の気持ちになることができればならない。その人にとって人生とは何なのか、その人は何になろうと努力しているのか、成長するためにその人は何を必要としているのかなどを、その人の「内面」から感じとるために、その人の世界へ「入り込んで」いくわけである。《しかし、私は成長したいという私自身の心からの欲求をよく理解し、それにこたえることができはじめて、相手に関しても、その成長したいという欲求や努力が理解できるものである。言い換えれば、他者の中に私が理解できるものは、私が自分自身の中で理解できるものだけなのである。》

相手の気持ちになるといっても、私は自分自身を見失うわけではない。私は自分のアイデンティティを保っており、相手と相手の世界に対する自分自身の反応をよく意識している。相手の目に映るようにその人の世界を見るといっても、その人の世界に対する

その人の反応と同じ反応を私も持つ、ということではない。だからこそ相手の世界の中で、私は当人を援助することができるのである。たとえば、その人ではできない何かを行うことである。ところで、彼が困惑していることを認識するには、私が困惑しなければならぬということではなくて、私が内面的に彼の困惑を「感じる」がゆえに、私は彼をその状態から助け出すことができる位置にいるのである。このような理解は、いくらでも細かいことに入っていくことができるし、いくらでも検討していくことができ、新しい経験と知識をとおして、私自身もたゆまず成長していくという結果になるのである。

ケアにおいては、相手ととも、いるということは、とりもなおさず相手のためにいるということでもある。成長しようとし、自らを確立しようとする努力している相手、その人のために私はいるのである。私は彼を見て、私と全く「同一の世界」に存在している人だと感じとっているのである。私は彼に恩きせがましいこと（彼を見下したり、私の下に置いたり）もしないし、彼を偶像視すること（彼を見上げたり、私の上に置いたり）もしない。要するに、私たちは同一のレベルで生きて働いているのである。もっと正確に言えば、私はそのレベルについても意識しない状態にいたのであり、いわば、レベルが異なっているかどうかで物事を見ることを超越しているのである。彼と私は共にその存在を是とされており、どちらか一方の犠牲のもとに他方が存在するものとして受け容れられているのではない。

さて、自分がケアされていると知っているとき、そのケアされているその人の立場からみると、「相手とともにいる」ということはどのようなものなのであろうか。相手が私とともにいれば、私はひとりぼっちだと感じはしないし、理解されていると感じている。それも、おぎなりの理解ではなく、私の身になってみればどう思うかを相手が知っている。私を感じているから、理解されていると感じるのである。私は、彼があまりのまの私を見ようとしているのを知っている。それは、私に関する判断を下すためではなく、私をたすけるためなのである。私は、ありのままの自分以上に見せるために自分自身をことさらかくす必要はない。それどころか、彼に対して率直に自分自身でいることができ、彼も私に率直になることができ、それで、彼が私をたすけやすくすることができるのである。相手が私の気持を汲んでくれていると知っていると、私は自分自身、そして自分の世界をもっともっと真に見つめることができるのである。それはちょうど、私の言葉を繰り返して述べてくれる人が、私に自分自身の考えていることを真に聴き入る機会を与えてくれ、また私の言葉の意味が、自分にとってさらにじっくりと納得できる機会を与えてくれるのと同様である。

出典：ミルトン・メイヤロフ／田村真・向野宜之訳

「ケアの本質 生きることの意味」ゆみる出版

2020年 92頁―96頁

From On Caring by Milton Mayeroff.

Copyright(c) 1971 by Milton Mayeroff. Used

by permission of HarperCollins Publishers.